

生活科

山 岸 朋 子
江 藤 里 佳

1 生活科における知識創造とは

生活科における
知識創造の定義

私たちは、生活科における知識創造を

「ひと」「もの」「こと」とかかわる活動や体験を通して「知的な気づき」を生み出し「生きてはたらく知恵」として自分の生活に生かしていこうとする営み

知的な気づき

と定義することとした。

「知的な気づき」とは、子どもが自分なりの思いや願いをもちながら「ひと」「もの」「こと」とかかわる活動や体験を通して、自覚された知恵である。子どもは、活動や体験の中で、さまざまなことに気づく。しかし、その気づきが、無意識で自覚されていない場合も見られる。また、何となく感じてはいるが、それをうまく表現することができないこともある。それらの個々の気づきや思いを教師が意図的に取り上げ、友達から認められる経験をすることや、他の気づきや思いと関連づける機会をもつことで、個の中に生まれた気づきが自覚され、強化されていくと考える。

生きてはたらく
知恵

また、自立への基礎を養うことを目標とする生活科では、子どもが自分の中に生み出された「知的な気づき」を自分の今後の生活に生かしていこうとするこも、大切にしていかなければならない。生み出された「知的な気づき」を自分の生活に生かしていこうとする思いをもつことで、「知的な気づき」が「生きてはたらく知恵」となる。それらの一連の営みが、生活科における知識創造であると考えられる。

2 生活科におけるかかわりの「場」をデザインするための考え方

生活科におけるかかわりの「場」をデザインするための考え方を、実感する体験を重視した具体的な活動と、長期的な見通しをもった単元設計という二つの視点から述べていく。

(1) 実感する体験を重視した活動のデザイン

体のさまざまな感
覚をはたらかせる
活動や体験

生活科の学習は、「ひと」「もの」「こと」とかかわる活動や体験を通して展開される。

「ひと」「もの」「こと」とかかわる活動を存分に味わえば、その活動の中で、視覚・触覚・聴覚・嗅覚・味覚など自分の体のさまざまな感覚をはたらかせ、全身で感じるができる。そうすることで子どもは、新しい事実を知ったり、気づかなかったことに気づいたり、豊かに感じるようになっていくであろう。子どもが、さまざまな感覚を使って「ひと」「もの」「こと」とかかわることができるように、課題の提示の場面や個々に分かれた活動の中で、体の諸感覚を進んで使いたくなるような教師のはたらきかけが重要となってくる。例として、目、手、耳、鼻、口などの体の部位を意識した課題提示や板書、ワークシートなどの工夫があげられる。

気づきや思いの交流
しかし、まだ生活経験が少ない子どもにとって、自分の感覚や思いだけでは気づきが広がってはいかない場合も考えられる。そこで、子どもそれぞれの気づきや思いを交流する活動を設定する。それにより、自分とは違う角度から「ひと」「もの」「こと」をとらえる見方や感じ方、自分とは違う気づきや思いを知ることができると思う。

共通体験をする活動
生活科においては、気づきや思いを交流する活動でも、実感を伴って「ひと」「もの」「こと」とかかわることが必要である。そこで、単元の中に共通体験をする活動を設定していきたい。自分が経験していないものについて、友達の気づきや思いを聞くだけでは、知識の蓄積に留まってしまう。クラス全体で同じ活動をする中で、活動の中から生まれる気づきや思いが、時には友達と同じであったり、時には異なっていたりするという経験を十分積ませたい。それらの経験を重ねる中で、自分が経験していない活動について紹介される場合であっても、自分の気づきや思いと比べてとらえたり、相手の思いを想像したりすることができるようになると思う。これらの共通体験は、子どもの発達段階を考慮し、効果的に設定していくことが大切であると思う。

実感を伴った追体験
また、友達の気づきや思いを、より実感を伴ってとらえることができるよう、体のさまざまな感覚を使いながら追体験する場面を設定していくことも必要である。友達の話を聞いただけでは、その気づきや思いを具体的にイメージすることが難しい場合も多い。友達の気づきや思いについて、自分で見つめ直してみる、触れてみる、確かめてみる、試してみるなどの追体験を行うことで、友達の気づきや思いを、自分の体験と重ねながら感じることができるようになるであろう。

このように、自分の実体験に基づいて気づきや思いをもつ、友達の「ひと」「もの」「こと」への気づきや思いを知る、それを自分の体のさまざまな感覚を使って追体験していく、という活動を繰り返すことで、子どもは、自分自身や友達の中に生み出された「知的な気づき」を自覚していくであろう。そして、それらを自分の既知の事実と関連づけて考え、自分の行動の幅を広げ、自分の生活に生かしていこうとすることで、「生きてはたらく知恵」となっていくと考える。

(2) 長期的な見直しをもった単元のデザイン

発達段階に応じた課題の設定
知識創造のプロセスを創出していくためには、学習時期や子どもの発達段階に応じた課題（発達課題）を適切に設定していくことが大切である。子どもにとって、ある発達の時期にしか経験したり、感じたり、獲得したりできないことがたくさんある。そして、それらの経験が後のさまざまな発達の可能性の礎となっていく。だからこそ、「いつ」「どのような」活動を設定していくか、その中で、子どもに「どんな力」を蓄えさせたいかを明確にもちながら、学習を進めていくことが重要である。

自分の成長に気づく活動記録や掲示
また、1、2年間を通して活動の記録を蓄積していき、それを学習に生かしていくことも大切である。活動の足跡が具体的に想起できるような教室掲示や継続した活動があれば、それらを基に、今の学習と比べて物事をとらえたり、考えたりすることができる。また、全体をふり返ることで、自分の成長にも気づくことになる。これらは、「生きてはたらく知恵」の形成にとって大切な要素であると思う。

3 実践例 - 2年 -

(1) 単元名 春のピースタウン ～あるあるなになに たんけんたい～

(2) 本単元における知識創造

とっておきの場所や気になる場所を探検することを通して ピースタウンの様子に関心を持ち 地域のよさや特徴に気づく

本校の子どもは、さまざまな地域から通学しているため、すべての地域において共通して地域とかかわる活動や体験をすることは難しい。そこで、本校が立地する平和町（ピースタウン）とかかわる活動や体験をすることによって、自分とピースタウンとのかかわりに関心を持ち、親しみをもつことができるようにしたい。そうすることで、いずれ自分の住んでいる地域とのかかわりにも目を向けることができるようになると思われる。また、実際に探検する活動を通して、自然を身近に感じたり、「ひと」「もの」「こと」の動きに目を向けて感じたりしたことを、これからの自分の生活に生かすことができるようになって欲しいと考える。

子どもは毎日通学路としてピースタウンを通ってはいるものの、ピースタウンの「ひと」「もの」「こと」とのかかわりはまだまだ薄いと思われる。そこで、本単元では第1学年の『学校探検』で培った力を基にピースタウンを探検し、今までより学校の周りの様子に関心をもつようになって欲しい。とっておきの場所や気になる場所を自分で見つけ、友達に紹介し、友達から教えてもらった場所へ行きたいという願いをもって探検をする。学校の周りのさまざまな場所と積極的にかかわることで、さらに素敵な場所を見つけることができるようにしていきたい。

(3) 知識創造の力を育むために

① 本単元におけるかかわりの「場」のデザイン

本単元は生活科で地域探検を扱う最初の単元である。そこで、学校の周りでみんなに紹介したい場所はあるかという問いかけから、毎日通っている学校の周りに改めて目を向け自分の知っていることや感じていることを自覚する場を設定し、もっと知りたい、行ってみたいという思いや願いを引き出したい。

本単元では、特に体のさまざまな感覚をはたらかせて感じる活動を共通体験できるように設定した。グループごとにちがう場所へ探検に出かけるのではなく、全員で一緒に探検し感じたことを交流する。そうすることで、友達の感じたことをより身近なこととして実感でき、同じ場所を探検してもさまざまな感覚で地域のよさを感じることができることに気づくであろう。

見つけたことや感じたことを交流する活動では、自分の見つけたとっておきの場所や、不思議なことがあるから見てほしい場所などを紹介する時間を設ける。友達から紹介された場所に目を向けることで、今まで気づかなかったピースタウンの魅力に気づくことができると思う。

繰り返し行う探検の前には必ず、何をめあてに探検に行くかを明らかにする時間を設け、探検の終わりにはめあてが達成できたかどうかをふり返るようにする。ふりかえりの場面では、以前の自分と今の自分を比較し、友達から紹介された場所を探検することを通してピースタウンの様子により関心を持ち、地域とかかわるよさに気づくことができるようにしたい。教師は子どもの変容をワークシートや対話などから見取り、学級全体に広げていく。友達のよさに気づくことからまた次の活動への思いや願いが膨らんでいくと考える。

② かかわりの「場」を支える長期的な取り組み

教科、道徳、特別活動などを通して、友達によさに目を向ける場をたくさん設けていきたい。よくないところやまちがいを指摘するのではなく、友達のよいところを見つけようとしたり、見つけたことを広める場を設ける。友達によさを見つけ自分をふり返ることで、友達によさを自分の次の活動の中で生かしていこうとするであろう。

朝の会では「季節のお知らせ」コーナーを設けている。自分の身の回りで季節を感じるような出来事や発見があった時にクラスみんなに知らせるといったコーナーである。子どもは動植物の変化や発見を初めは言葉で表現していた。そのうち相手に分かりやすいように絵に描いたり本物をもってきて手触りや香りを紹介するなど工夫して表現するようになってきた。これらの経験を通して伝えたいことを表現する方法の工夫や、五感を使うよさに気づいて欲しいと考えている。

4) 単元計画（総時数12時間）

主な活動と内容	かかわりの「場」のデザインと教師の意図
<p>1 学校の周りには 紹介したいことや もっと知りたいことがあることに気づく 〈ピースタウンって どんなところだろう〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・いつも通る道に お気に入りの場所があるよ ・何ていうお花かなあと思うお花があるよ ・考えたことなかった 帰りに見てみよう 	<p>○ピースタウンの「ひと」「もの」「こと」と自分のかかわりを自覚する 単元の最初にピースタウンと自分のかかわりを意識する場を設けることによって、単元の最後に新しい発見や気づきがあったことに気づくことができるようにする。</p>
<p>2 探検したい場所を紹介し合い どうやって探検に行くか考える 〈あるあるなになに 大はっけん〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・わたしのあるあるは ペンペン草っていう草です ・わたしのなになにはお花です よく見るお花だけ何ていう名前が分かりません 教えてください ・どれも行きたくない どうやって行こうか 	<p>○自分が見つけたことや感じたことを 発表し合う 自分とはちがう角度からピースタウンをとらえている子同士で発表をし合うことで、今まで気づかなかったことに気づき、さまざまな視点をもつことができるようにする。そして、知らないところも探検してみたいという思いをもつことができるようにする。</p>
<p>3 探検に行くための 準備をする 〈たんけんに行く じゅんぴをしよう〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・行きたい場所がたくさんあるから 行く順番を決めよう ・わたしの行きたい場所は何番目になるかな ・こんなたくさんの場所があるんだね ・紹介する人が先頭になってくれたら場所が分かるね ・紹介したら後ろに回ってっていうのはどう ・そうだね どの順番で回ろうか ・みんなが揃っている日に探検に行きたいな ・見つけたことをかく紙ももっていきたいな ・もう準備は バッチリだね ・いよいよたんけんだ ときどきわくわくするね 	<p>○願いや思いを実現するために 気づきや思いを交流する 探検に行きたいという共通の願いや思いを実現するために、自分のアイデアと友達のアイデアを交流する時間をとり、自分のよさを自覚したり、友達のよさに気づき、自分に生かすことができるようにする。交流によって生まれた知的な気づきに気づくことができるように教師も対話に加わり、そのよさを学級全体に広めていく。</p>
<p>4 探検に行く 〈あるあるなになにたんけんたい しゅっぱつだ！〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・○○さんが言っていたお花 見つかるかな ・ペンペン草を見つけたら ペンペンってしたいな ・このお花 いい匂いがするよ かいでみて ・へんな草があるよ こばんそうって言うんだよ ・クラスノエンドウがまっくらになっているよ この間までみどり色でふえができたのにな ・たくさん見つけたね みんなで地図にしよう ・よく見ると野菜だけじゃなくて家もたくさんあるね ・1回目や2回目の探検では気づかなかったよ 	<p>○思いや願いをもって探検に行き 五感をはたらかせて感じる 友達から聞いた気づきをより実感を伴ってとらえることができるようにみんなで考えた探検コースを通り友達の気づきを体験する。 クラス全体で同じ場所を探検することで、自分の気づきが友達と同じであったり、異なっていたりすることを経験し、友達の感じ方のよさを自分の活動に生かすことができるようにする。</p>
<p>5 探検をふり返る 〈あるあるなになにたんけんマップを作ろう〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ピースタウンには おもしろいものがあったよ ・前は裏門の方しか知らなかったけど 今は前門の方も分かるようになったよ ・お店や家がたくさんあるところもあるんだね ・もっとピースタウンのことを知りたいな 	<p>○ピースタウンと自分とのかかわりが変化したこと気づく 班ごとに分担して地図をつくることを通して、地域によって町の様子がちがうことに気づくようにする。単元の学習が始まる前と終わった後のピースタウンに対するかかわりを比べることにより、たくさん発見があったことに気づくことができるようにする。</p>

(5) 本単元における授業の実際と考察

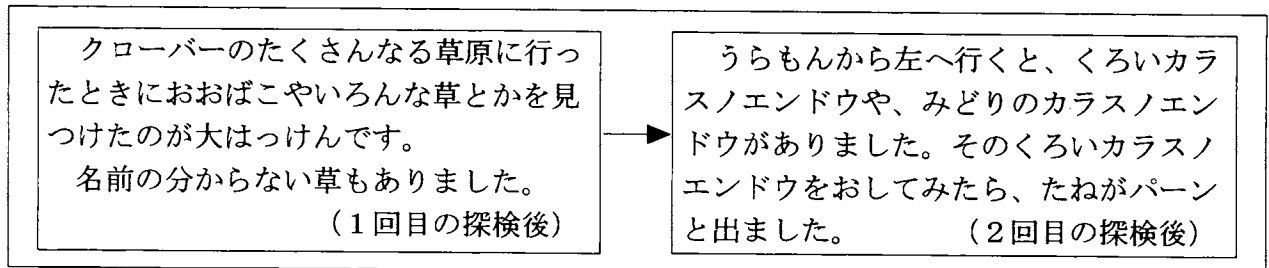
本単元では①実感する体験を重視した具体的な活動と②長期的な見通しをもった単元設計という二つの視点から、かかわりの「場」をデザインした。そこでこの二つの視点から、本単元における知識創造「とっておきの場所や気になる場所を探検することを通して ピースタウンの様子に関心を持ち 地域のよさや特徴に気づく」を促すことができたかを、子どもの発言やふりかえりカードの記述をもとに考察していく。

① 実感する体験を重視した具体的な活動のデザイン

ア 体のさまざまな感覚をはたらかせる活動や体験

単元を通して、3回探検に出かけた。その際に、なるべく見るだけでなく、手で触れる、香りをかぐ、音を聴くなどの活動を取り入れていった。何人かの視覚以外の気づきを述べる子どもの意見をとりあげ、その場で触れてみる、香りをかいでみる、ふりかえりの場で板書に位置づけるなどの方法でさまざまな感覚をはたらかせる価値を広めていった。そうすることで単元の初めの頃は見たことだけを発表していた子どもが、単元の終わり頃には見たことだけでなく、触った感じや音などを意識して、話したり書き表したりすることができるようになっていった。

1回目の探検の時、カラスノエンドウがたくさんある場所で、カラスノエンドウ笛を作ってみた。子どもはそうしながら、種が中にたくさん入っていることやさやがふくらんでいるものとそうでないものがあることなどに気づいていった。その後、通学路で真っ黒になったカラスノエンドウを見つけ、「黒くなっていてびっくりしました。だからカラスノエンドウっていうのかなと思いました。」と朝の会で紹介した子がいた。みんな珍しそうに手に取り見せてもらっていた。2回目の探検では、子どもは真っ黒に変身したカラスノエンドウを自分の目で見つけ、手に取り笛を作ろうとした。ちょっと触っただけではじめてしまうさやに驚く子、はじけた後はさやがくると巻いていることに気づく子もいた。A児は1回目の探検では見つけたことだけをふりかえりに書いていたが、2回目の探検では触れたときの様子についても書いている（資料1）。



資料1 A児のふりかえりカードから

さまざまな感覚をはたらかせた発見は他にもあった。いろいろな草に興味をもった子どもは、目にする草を手で触ってみたり香りをかいでみたりするようになった。白いきれいな花を咲かせるけどドクダミの葉がとともくさいことや、見た目は普通の葉だけど歯磨き粉みたいなスーッとする香りの葉があることなどに驚いていた。また、「はっばのシールだ。」と言って制服にくっつく葉があることに気づいた子もいた。その様子を見た他の子も、みんなその葉を一枚ずつ採って、自分の制服につけ楽しんでた。そうする中で、自分の制服よりも担任の服の方がくっつきやすいということや、同じ葉でも表よりも毛が生えている裏の方がくっつきやすいということに気づく子もでてきた。

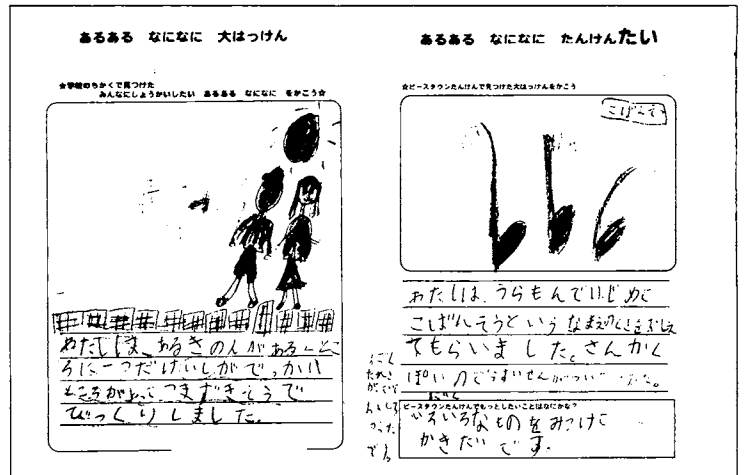
五感をはたらかせることで、今までは気がつかなかった「ひと」「もの」「こと」に対する発見をすることができた。ピースタウンにはおもしろいものがいっぱいあり、まだまだ自分が知らないひみつがありそうだという気づきにつながった。

イ 気づきや思いの交流

自分とはちがう角度から草花や町の様子をとらえる方法があることを知って欲しいと考え、それぞれの気づきや思いを交流する時間を設けた。自分が一番心に残った発見を絵で表して友達と見合ったり、気づいたことを発表したりした。

単元の導入場面では、自分が日頃通学している道で見つけたことの中から、みんなに紹介したいことや不思議だから知りたいことをワークシートにかいた。子どもはいろいろな対象に目を向け、さまざまな思いを表していた。これらを交流することで、今まで気づかなかった自分の思い以外のいろいろな見方に気づかせたいと考えた。交流の後には、自分が見つけた対象以外のものに興味をもつようになる様子が見られた。

B児は、紹介したいことを、なかなかかき始められなかった。そのうち、友達がかいていることを参考にして紹介したいことをかくことができた。そのときの対象は石であったが、友達と交流したことでB児は草花に興味をもったようである。その後の探検のふりかえりでは草花に目を向けてかいている（資料2）。この探検で裏門付近を歩いていて「これは何？かたくて虫みたいなのがついているよ。」と珍しい草を見つけた子がいた。



資料2 B児のふりかえりカード

名前が分からずにみんなが首をひねっていると、C児が「これ見たことあるよ。こぼんそうって言う名前だよ。」とみんなに教えた。知らない草の名前を知っているC児に教えてもらったことで、草には一つ一つ名前があり、まだ自分が知らない草がいっぱいあるということに気づいていた。そのときのふりかえりに「わたしはうらもんのところでこぼんそうというみを見つけました。はじめて名まえを知りました。手の中でゆらすと「トントン」という音がします。こぼんみだからこぼんそうだなあと思いました。」と書いている子がいた。その他にも、たくさんの子がふりかえりでこぼんそうについてふれていた。

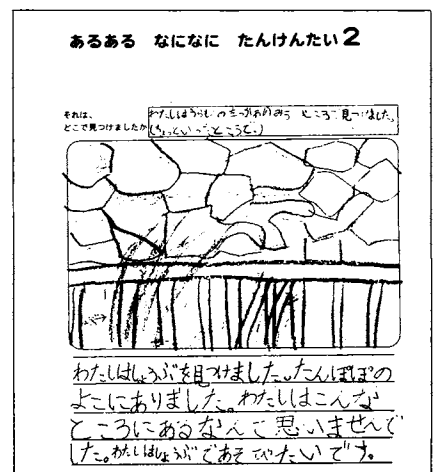
これをきっかけとして、名前の知らない草や花を見たら図鑑で名前を調べる子や、どんな時期の草花か、どんな場所に咲くか、どんな特徴があるかなど、調べたことを紙にかいてみんなに紹介する子も増えてきた。このことから、気づきや思いを交流させることで、自分だけで見ていたのはちがう角度から草花や町の様子をとらえ、それを自分の生活に生かしていくことができたと考える。

ウ 実感を伴った追体験

6月の朝の会で、家から花菖蒲をもって来た子がいた。子どもは1年生の生活科で葉菖蒲について学習していたので、その時の菖蒲と目の前の花菖蒲を比べて、花の違いはあるが葉の形が似ていることなどに気づいていた。「わたしの家にも咲いている。」と身の回りに目を向けた発言もあった。

その次の探検で菖蒲が咲いているところを通った後、D児はこんな身近で菖蒲を見つけたという喜びと、それを使って遊びたいという思いをふりかえりで書いている（資料3）。

1年生の時に菖蒲で笛を吹いたり頭に巻いたりした経験と、友達が朝の会で紹介した花菖蒲が結びついたのであろう。



資料3 D児のふりかえり

このように実感を伴った追体験ができるように、自分が紹介したい所へ実際に行き、本物の前で友達に紹介するという活動を設定した。紹介された方は、友達が言っていたのはこれなんだと本物を見る、触れる、香りをかぐ、それで遊んでみるという体験を通して、次に同じものを見たときに、それまでは目にとまらなかったものの存在に気づいたり、前と比べてちがう部分分かる自分に気づいたりすることができるのである。この経験は、自分の行動の幅を広げ、自分の生活に生かしていこうとするためにも貴重であると考えられる。

エ 共通体験をする活動

3回目の探検では「あるあるなになにたんけんマップ」をつくるというめあてを設定した。今まで探検して紹介したいと思った学校の周りの様子を、他のクラスの友達にも知らせたいという思いをもってマップ作りにとりかかった。さまざまな前の探検後の交流を生かした新しい気づきが生まれるように、そして生まれた新しい気づきをさらに交流したくなるように、班ごとに地域を分担して、クラス全体で地図を仕上げていくことにした。

地図に表すというめあてがあったことで、子どもは自分たちが表す地域をより詳しく見ようとしていた。ちょっとした鳥のさえずりも聴き逃さず、木の上にある鳥の巣を見つけたり、前に来たときと同じ場所なのにちがう花が咲いていることに気づいたり、新しい気づきをたくさん生んでいた。

班の友達と一緒に地図に表す中で、同じ場所を見てきたのに異なった気づきがあるということに気づいていた。E児は自分たちも育てているからか、野菜に興味を示していた。畑や家庭菜園で美味しそうに成長している野菜をたくさんメモしてきていた。F児は名前を知らない花を見つけたら、家に帰って図鑑で調べるくらいに花に興味を示していた。メモには知っている花の名前や、知らない花の色や特徴が詳しく書かれていた。二人はお互いのメモを確認しながら野菜や花の絵で地図をいっぱいにしていった(写真1)。

班ごとの地図ができ上がり、みんなの地図を合体させたとき、「うわあ。」と歓声が上がった。「さっきまで真っ白な地図だったのに、みんなで作ったら、あつという間にいっぱいになった。」とみんなで作ることの価値に気づいた発言があった(写真2)。

また、クラスでピースタウンの地図を作ったという共通体験は、表現方法の工夫や、自分が表した地域とのちがいを感ずるためにも有効であった。どのように地図を構成していくとみんなが見やすくなるか、知らせたいことが伝わるかをそれぞれの班で話し合い工夫していたので、ふりかえりの場面では「〇班のかき方が、本当に歩いている向きでかいてあって分かりやすかったです。」「私たちの所は草や花ばかりだったけど、〇班のところはお店がいっぱいあるんだってわかりました。」などの意見が出てきた。バラバラだったものを合わせて見ることで視野が広がり地域全体という目でピースタウンを見直す機会となった。

「〇班のところは家がたくさんあって、私はあまり見ていなかったからもう一回見てみたいです。」「〇班のは白いところがあるけど、まだ行ってないところだからそこへも行ってみたいくなりました。」という発言もあり、次は自分でも行ってみたいという意欲につながったことがうかがえる。



写真1 班で地図作り

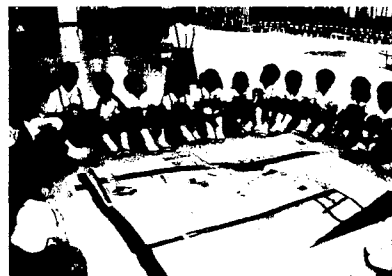


写真2 みんなの地図を合体

② 長期的な見通しをもった単元のデザイン

ア 発達段階に応じた課題の設定

ピースタウンを生活科において扱うのは本単元が初めてである。そこで、今回はクラス全体で探検した。そうすることで、実感をもって探検し、視野を広めていろいろな見方でピースタウンを見ることができるようになって欲しいと考えた。そのために、探検の度にめあてを確認しながら繰り返し探検を行い、まとめはみんなで行った。子どもは安心していろいろな発見をし、実感をもちながら視野を広げていった。しかし、どの探検でも発見を増やすことに重きを置いている子が多く、ふりかえりでは、「まだ行ってないところへ行ってみよう。」「地図であいているところやいろいろなところに行きたい。」という考えが多くみられた。

しかし、本単元の「とっておきの場所や気になる場所を探検することを通して、ピースタウンの様子に関心をもち、地域のよさや特徴に気づく」という知識創造から考えると、気づきの深まりという点では物足りない結果となった。これは、教師が本単元を通して「どんな力」を子どもに蓄えさせたいかという、具体的なイメージが甘かったためであると考えられる。どこに何があるかに関心をもち気づくだけでなく、どの子どもそれらが地域のよさであり特徴であることに気づく機会が必要であった。気づきが深まるためには、気づいたことを発表し合うだけでなく、そこから分かったことや感じたこと、全体をとらえて気づいたことなどについて話し合う時間ももっと必要であった。子どもから出された疑問や、さらなる探求心を次の探検につなげることで、さらに深まりのある気づきを生み出すことができたのではないかと考える。

イ 自分の成長に気づく活動記録や掲示

活動の記録としては、個人でかいたワークシートと、クラスのみんなで作り上げていった地図があげられる。

このうち、ワークシートについては形式の工夫に課題が残った。子どもの気づきはその時々五感を使った鋭いものがたくさんあったのだが、ワークシートの形式が単調であったため、ふりかえりの場面では探検で見つけたものをかくことに終始する子が多々みられた。さまざまな感覚をはたらかせたことを想起できるような声かけや、いくつも絵を描くスペースを作ったり五感マークを入れたりするなど、探検のめあてに合ったワークシートの形式の工夫が必要であった。

地図については、他のクラスの子が見えるところに掲示したことで、地図の前で別のクラスの友達に紹介するというよい姿がみられた。しかし、伝えたいことを見た人に伝えるには今の地図では難しく、伝えたいことを十分に表す方法の工夫が必要であると感じた。

(6) 成果と課題

本単元において、上述した以外にも、通学路や自分の住んでいる地域で見つけたことや気づいたことについて朝の会の「季節のお知らせ」などで紹介する子や、絵や文で紙にかいてきてみんなに見て欲しいと掲示する子など、生み出した「知的な気づき」を自分の生活に生かしていこうとする姿を見ることができた。中でも植物の名前や形についてよく紹介するF児は、最後のワークシートに「ピースタウンは、いつも見ているはずなのに、わからないことがたくさんありました。だからもっとしらべてもっとくわしくなりたいです。あきになったら色もかわると思うから楽しみです。」と書いている。これは、今までの生活を生かして考えた言葉であろう。このF児はもうすでに次の課題を見据えていると言える。

しかし、活動を楽しむことに終始し「知的な気づき」に十分に気づいていない子も見られた。今後は「どんな力」を蓄えさせたいかを具体的にイメージした上で、子どもの気づきや思いが、目標に向かう形で交流するような学習を展開していくことが必要である。